# 旧制女学校における課外のスポーツ活動の進展過程に関する研究
## ——新聞社主催の大会（1919年）がもたらしたもの——

赤　坂　美　月

## 1. は　じ　め　に

旧制女学校における課外のスポーツ活動は，どのようにはじまりどのように進展していったのか。また，生徒はどんなスポーツに取り組み，それは生徒にとって何であったのか。筆者はこのような課題をもち，掛水[1]，來田[2]らの著書を参考にこれまで兵庫県下の女学校について確認してきた。

そして，1901（明治34）年，兵庫県下ではじめて開校された兵庫県立第一神戸高等女学校（以下「県一高女」と略・現在の兵庫県立神戸高等学校[(1)]）において，開校当初から「身体の強健なる女子生徒」をつくるために，学科目「体操」以外にもすべての生徒が課外の運動（主な資料である「会報」をみた限りでは1926・大正15年にはじめて「スポーツ」という語が用いられている）に取り組んでいたこと。その後，1919（大正８）年，同校はじめての対外試合となる庭球（現在のソフトテニス）の大会に出場したことから，課外の運動が大会を意識したものを含むものとなっていき，そのために校友会の運動部が組織化されていった

（1） 当初は兵庫県高等女学校と称し，1901（明治34）年４月に兵庫県立高等女学校，1910（明治43）年に兵庫県立神戸高等女学校，1925（大正14）年に兵庫県立第一神戸高等女学校と改称した。なお兵庫県立第一神戸中学校と県一高女が合併し，戦後の1948（昭和23）年９月，兵庫県立神戸高等学校となる[48]。

こと。そしてそれらは，体育として，すべての生徒を対象とすることを最も重視するという方針で実施されていたことなどを知ることが出来た[3]。

しかし，以上のように確認したなかで，いくつか疑問点が残された。そのひとつは，1919（大正8）年7月，はじめての対外試合である「大阪時事新報社主催」の「関西女学校庭球大会」へ出場する「きっかけ」である。それは，「新聞社から再三の依頼に我校も参加することになつた」[4]とされる記述であり，大会への出場を，学内からではなく，新聞社から促されて決定した，ととれるものである。

もうひとつは，同年，「バレーボール競技開始，5月頃よりこの遊戯が開始された，毎週金曜には新聞社の方が教へに来られた」[5]とされているものである。この新聞社は，兵庫県立神戸高等学校の『90年のあゆみ』に，「5.22 大毎記者大塚銀次郎氏らに，初めてバレーボール競技法の指導を受ける。（本校排球競技の初まり。)」[6]とされており，「大阪毎日新聞社」のようである。なぜ，大阪毎日新聞社の社員が県一高女へバレーボールの指導に来たのか。

このように，各新聞社と県一高女における課外の運動とどのような関係があったのかを確認してみたいと考えた。

その方法として，当時の「大阪時事新報」，「大阪毎日新聞」をみてみることにした。しかし，資料とすべき「大阪時事新報」は，筆者の探した範囲では所蔵の確認が出来ず，「大阪毎日新聞兵庫県付録」のみが資料となった。

そして，1919（大正8）年5月から「大阪毎日神戸支局主催」による「バレーボールのコーチ開始」が行われていたこと。同年12月，「同局主催」の「女子バレーボール競技大会」が開催されていたことを確認した。

女子のバレーボールのはじまり(2)やこの期における女子のバレーボールと新聞

---

（2）『日本バレーボール協会五十年史』『最新スポーツ大事典』以外に，『スポーツ大百科』は，「バレーボール……女子の大会も大正7年（1918）の朝日新聞社主催による広島県女子中学校大会が，また，大正8年（1919）には毎日新聞社主催による兵庫県女子中学校大会が開かれ，女子のスポーツとしても次第に普及発達」[49]

社との関わりについては，『日本バレーボール協会五十年史――バレーボールの普及と発展の歩み――』（以下『日本バレーボール協会五十年史』と略）に，「大正7年，大阪朝日広島通信部主催の広島県女子中学校競技種目のなかに排球種目が加わり，翌8年には，大阪毎日神戸支局主催で兵庫県立女学校排球競技会が開催された。日本排球協会はまだ創立されていなかったが，排球に対するマスコミの支援（特に女子）の先駆をなすもの」[7]とされている。また，『最新スポーツ大事典』には，「1921（大正10）年に12人制が採用されるのとあい前後して，バレーボールは旧制女学校にも普及していった。その陰には，地方新聞社の果たした役割がひじょうに大きかった。当時，各新聞社は，社会還元事業または文化育成事業の一環としてバレーボールの競技会を主催もしくは後援し，1927（昭和2）年に大日本排球協会が創立されるまで，日本体育協会とタイアップしながらその育成発展に大きく貢献」[8]とされている。

これらからすれば，新聞社は，女子のバレーボール普及の役割を果たしたということであり，1919（大正8）年12月に開催された「大阪毎日神戸支局主催」の「女子バレーボール競技大会」は，日本ではじめての女子のバレーボール単独の大会ということになる。

今日，マスメディアを通してスポーツ情報は溢れんばかりに流れてきている。また，その与える影響の大きさは計り知れないものがある。近年，西原らの先行研究がみられる[9][10][11]。

県一高女を通してではあるが，明治期から行われていた課外の運動が，大正期となり，大会を意識したものを含むものへと進展していこうとする過程において，新聞社はどのような役割を果たしたのであろうか。

---

とある。木下は，「排球は大正7年に廣島で開かれたのが嚆矢とされて居る」[50]とし，佐々木は，「当時男子のバレーボールはYMCAで行なわれていただけであった……，女子のバレーボールは，次第に女子のスポーツとして普及発展する傾向をみせ，1919年（大正8）には兵庫県女子中等学校大会が始められた」[51]としている。

そこで本研究は，主に1919（大正８）年における「大阪毎日神戸支局主催」による「バレーボールのコーチ開始」や「女子バレーボール競技大会」実施の目的や状況をまとめたものである。そして，新聞社主催による庭球やバレーボールの大会に出場した県一高女の関係者や女子生徒はこれらをどのように受け止め，その後の課外の運動がどのように進展していったのかについて再確認するものである。なお，引用文の漢字については旧字体を新字体に改めた。

## 2. 大阪毎日神戸支局主催「バレーボールのコーチ開始」

1）1919（大正８）年５月22日（木曜日），大阪毎日神戸支局主催「バレーボールのコーチ開始」

1919（大正８）年，県一高女において「バレーボール競技開始，５月頃よりこの遊戯が開始された，毎週金曜には新聞社の方が教へに来られた」ことの事情が確認出来ないかと「大阪毎日新聞兵庫県附録」をみてみると，５月22日（木曜日），「婦人や児童に新運動を勧奨す　バレーボールのコーチ開始　主催大阪毎日神戸支局」という案内が載せられていた。その内容は次のようである[12]。

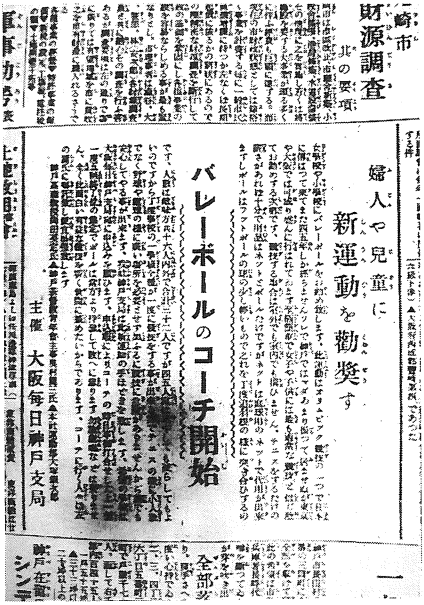
婦人や児童に新運動を勧奨す

女学校や小学校にバレーボールをお勧め致します，此運動はオリムピツク競技の一つで日本に伝はつて来てまだ四五年しか経ちませんソレで神戸ではマダあまり振つて居ませぬが東京や大阪では可成り盛んに行はれてゐます至極簡単で女子や子供には最も適当な競技と信じ敢てお勧めする次第です，競技する場合は室外でも室内でも構ひません，テニスをするだけの広さがあれば十分で用品はネツトとボールだけですがネツトは庭球用のネツトで代用が出来ますしボールはフツトボールの球の少し軽いもので之れを丁度追羽根の様に突き合ひするの

バレーボールのコーチ開始

です，人数は敵味方共16人内外で合計32人ですが四五人宛は増やしても減らしてもよいのですから丁度学校の一学級全体が一度に競技をする事が出来る訳でテニスの様に少人数でなく野球や蹴球の様に広い場所を必要とせず加ふるに競技に危険がありませんから誰でも安心してやる事が出来ます，我社神戸支局は此新運動の手ほどきを致します，希望の学校は大阪毎日神戸支局宛に申込みを願ひます，申込順によりコーチの時日等打合せした上１週１度５回終了位の予定でボールは当方より持参して教へに参ります勿論謝礼などは要りません，全く此面白い有益な競技を広く世間に拡めたいからであります，コーチに行く人々は左の諸氏に嘱託致し便宜出張致します

神戸高商教授岡田英定氏▲神戸基督教青年会奥村龍三氏▲本社運動部大塚銀次郎


財源調査
北の要項
婦人や兒童に
新運動を勸奬す
バレーボールのコーチ開始
主催　大阪毎日神戸支局

大阪毎日新聞兵庫県附録
1919（大正８）年５月22日より

旧制女学校における課外のスポーツ活動の進展過程に関する研究

主催　大阪毎日神戸支局

ところで，兵庫県において，バレーボールはいつ頃から行われていたのであろうか。県一高女の『創立三十周年記念誌』には，「排球を初めて我国に紹介せしはF•H•ブラウン氏なり。氏は大正2年に東京にて，大正4年に関西地方にて此の技を伝へたり。同6年頃より本技は女学校に於て僅かに試みらるるに至り，兵庫県に於ては大正8年秋始(ママ)めて県下女学校排球大会を開催されたるなり」[13] と記されている。

上記「バレーボールのコーチ開始」案内に載せられている嘱託コーチの確認もあわせて『日本バレーボール協会五十年史』，『ザ・パイオニア——神戸大学バレーボール部六十年史』等を確認してみた。(3)(4)

---

(3) 『日本バレーボール協会五十年史』には，「京都，大阪，神戸のYMCAは，ブラウンの指導を強く要望していたので，ブラウンは住居を神戸に移し，大正4年の春から翌年の夏までその体育プログラムの強化のため巡回指導に当たった。……この間，ブラウンは請われて神戸高商の陸上競技の指導に当たっていたが，かたわらバレーボールの指導も行った」[52] とある。『ザ・パイオニア－神戸大学バレーボール部六十年史』のなかで高商17回生の渡邊逸郎は，「私が神戸高商へ入学したのが大正8年，……F•H•ブラウンが，同4年，関西に来て，大阪，京都，神戸のYMCAや神戸高商に，陸上競技やバスケットボールと共に，バレーボールを教えた。……神戸高商ではそれは陸上競技の補助運動として，受け継がれて」[53] としている。

(4) 『日本バレーボール協会五十年史』には，「多田徳雄……大正9年に神戸高商に勤務し，……それ以前から神戸高商はブラウンと同校の岡田英定体育科教授の指導を受け，排球についてかなりの基礎を保有していたので，関西方面の中心」[54]とある。『ザ・パイオニア——神戸大学バレーボール部六十年史』にある「座談会『神話時代から黄金時代へ』」のなかで，先の渡邊は，岡田英定について「私の入ったときにはおられた」「岡田教授は，私の聞いた所では，全国で官立の専門学校の体育の教官で教授は先生ただひとり，……岡田先生自身のバレーボールちゅうのはあまり見たことがなかった。口で指導するだけで，実技はあまり見せてもらえなんだ。(笑い) 岡田先生がどこで学ばれたか，たぶんブラウンからきてるとは思うんですがね」[55] としている。

また，『凌霜五十年』(学内版) に，先の多田は岡田英定について，「先生は所謂体操一点ばりで競技運動の御経験は少なかったが，競技に対する理解は極めて深く

1919（大正8）年6月13日付の「大阪毎日新聞兵庫県附録」には，「神戸高商は我国に於けるオリムピツク競技界のオーソリチーで之れまで多数の名選手を出してゐる，……神戸基督教青年会はバレーボールに於て最も古い歴史を有し7年に亘る(5)熱烈なる洗練を経てゐる勿論其選手には多少の異同はあつたけれど共に斯界に於ける優越者たる事は万人の認むる所」[14] ともある。

これらによれば，『創立三十周年記念誌』にあるブラウンが1915（大正4）年に「関西地方にて此の技を伝へたり」のなかに，神戸基督教青年会と神戸高商（現在の神戸大学）がある。そして，大阪毎日神戸支局主催「バレーボールのコーチ開始」の嘱託コーチのひとり，神戸高商の岡田英定は，すでにバレーボールを知る人物であること。神戸基督教青年会奥村龍三については，バレーボールとの関わりの確認は出来なかったが，神戸基督教青年会はすでにバレーボールに取り組んでいる。「同6年頃より本技は女学校に於て僅かに試み」「大塚銀次郎とバレーボールとの関わり」は確認出来なかった。

さて，「神戸高商岡田英定」「神戸基督教青年会奥村龍三」という「すでにバレーボールに取り組んでいるもの」と「大阪毎日神戸支局」（大塚銀次郎が大阪本社の社員であるということは，大阪本社と神戸支局によるものと考えられる）のどちらが先に話を持ちかけたかの確認は出来なかったが，両者合意のもとに，「全く面白い」「有益な」「競技」である新運動バレーボールを，広く世間に普及させようとした，と考えられないか。

その方法として，「至極簡単で女子や子供には最も適当な競技」「競技に危険がありませんから誰でも安心(6)」ということから，「女学校」と「小学校」に的

---

現在新制大学で実施しているシーズン制を既に大正12,3年頃考案し，体操時間をあらゆる競技運動に切りかえようとされたのであるが，学生数の多い割合に運動場が狭いため，この名案も実現できなかった」[56] としている。

（5） 神戸 YMCA のホームページには，1886（明治19）年，神戸 YMCA 設立。1912年，体育部活動開始（バスケットボール・バレーボール・インドアベースボールの紹介，剣道・柔道始まる）とある[57]。

をしぼった。そして，「1週1度5回終了位の予定」で，「ボールは当方より持参」「謝礼などは要りません」として，コーチ依頼の募集を行い，新聞社嘱託というかたちで，3人が実際に指導に出向き，ルールや技術，方法などを教えバレーボールの紹介とともに実践者を増やそうとした。

施設・用具については，「室外でも室内でも構ひません」「野球や蹴球の様に広い場所を必要とせず」「テニスをするだけの広さがあれば十分」「ネツト（庭球用のネツトで代用が出来ます）とボール（フツトボールの球の少し軽いもの）だけ」とし，「テニスの様に少人数でなく」「人数は敵味方共16人内外で（四五人宛は増やしても減らしてもよい)」ボールを「丁度追羽根の様に突き合ひするのです」との紹介である。

そして，大阪毎日新聞兵庫県附録紙上に「バレーボールのコーチ開始」の案内にはじまり，指導の実施状況を掲載することによって読者に興味・関心をもたせるという方策をとった，と考えられる。

2）大阪毎日神戸支局主催「バレーボールのコーチ開始」の実施状況

大阪毎日新聞兵庫県付録には，5月22日付の「バレーボールのコーチ開始」

---

（6）『日本バレーボール協会五十年史』には，「大正6年……第3回極東大会……その後期待したほど急速の発展がなかった理由として，①男子には発展途上の多くの活発なスポーツがある。ただし，身体的接触がないので女子種目には好適である。②片側のコートに16人もいるので，1ゲーム中にボールに一度も触れる機会がなく，唯一のチャンスであるサーブ順が待ち遠しかったこと。また寒さにふるえているところへ，予期しないボールが飛んできてポロリと落とすなどして失望させ，そして32人のメンバーをそろえることが困難な時代」とある[58]。『最新スポーツ大事典』には，「当時，男子のあいだではさまざまなスポーツが行われていたが，バレーボールを最初に見た旧制中学や旧制女学校の教員は，運動量，人数，その他の点から女子向きのスポーツと判断して<女子のスポーツ>いうイメージが固まった」[59]とある。白銀は，「バレーボールは男子はYMCA中心に行われていたのに引き替え，女子は女学校で広く行われる傾向がみられた。これは，当初1チーム16人制（4名×4列）でボールを打ち合うため，ほとんど立ったままボールをパスするといった状況で，当時の女性の服装と相まって，女性向きのスポーツという見方が定着したものと思われる」としている[60]。

の案内に続き，その実施状況について３日間の掲載がある。表１には，それに加えて，関連記事である「女学校体操教師のバレーボール見学」と大阪毎日神戸支局後援「神戸高商対神戸基督教青年会　バレー・ボール競技」の見出しと主な内容を取り上げた。

ここでは，「バレーボールのコーチ開始」と「女学校体操教師のバレーボール見学」について，日にちにそって確認した。

「バレーボールのコーチ開始」案内の翌日，23日（金曜日）には，「大阪毎日神戸支局主催　バレーボールコーチ　発表と同時に申込んだ　県立神戸高等女学校　申込と同時にコーチヤー出張　2時間に亘り愉快な練習」といった見出しに「１週１度５回で終了，申込は支局宛」「設備はテニスコートで十分（ボールは当方より持参）」「コーチに行く人は……」を添えてその日の最初の記事として扱っている。

「我神戸支局が昨日の紙上に女学校や小学校に対してバレーボールのコーチ開始の社告を発表するや直に県立神戸高等女学校から来て貰ひ度いとの申込が

大阪毎日神戸支局主催
バレーボールコーチ
發表と同時に申込んだ
縣立神戸高等女學校
申込と同時にコーチヤー出張
二時間に亘り愉快な練習
一週一度五回で終了、申込は支局宛
設備はテニスコートで十分（ボールは當方より持參）
コーチに行く人は
物價

大阪毎日新聞兵庫県附録
1919（大正８）年５月23日より

表1　1919（大正8）年，大阪毎日神戸支局主催「バレーボールのコーチ開始」，「女学校体操教師のバレーボール見学」，大阪毎日神戸支局後援「神戸高商対基督教青年会　バレー・ボール競技」に関する記事

| 日にち | 曜日 | 見出しと主な内容 |
|---|---|---|
| 5.22 | 木 | 婦人や児童に新運動を勧奨す　バレーボールのコーチ開始　主催大阪毎日神戸支局 |
| 5.23 | 金 | 大阪毎日神戸支局主催　バレーボールコーチ<br>発表と同時に申込んだ　県立神戸高等女学校　申込と同時にコーチヤー出張　2時間に亘り愉快な練習<br>1週1度5回で終了，申込は支局宛　設備はテニスコートで十分（ボールは当方より持参）<br>コーチに行く人は<br>神戸高商教授　岡田英定氏　基督教青年会主事　奥村龍三氏　本社運動課員　大塚銀次郎氏<br>午前9時から　60余名　補習科生　練習希望 |
| 5.27 | 火 | 女学校体操教師の　バレーボール見学　此競技は益々普及する |
| 5.28 | 水 | バレーボールコーチ　日割決定<br>火曜　午前　御影町立尋常小学校　午後　親和高等女学校<br>木曜　午前　県立神戸高等女学校　午後　入江尋常小学校<br>金曜　午前　松陰高等女学校　午後　兵庫女子尋常高等小学校<br>大阪毎日神戸支局 |
| 6.8 | 日 | バレーボールコーチ　各校とも素晴しい上達　県下運動界に一新生面開かる<br>バレーボールコーチ日割<br>月曜午後3時から　神戸女学院　火曜午前10時から　御影小学校　同午後2時から　親和女学校<br>水曜午後1時から　脇濱小学校　木曜午前9時から　県立女学校　同午後1時から　入江小学校<br>金曜午前10時から　松蔭女学校　同午後2時から　兵庫女子小学校<br>進歩の速度　球に慣れて　容易に出来 |
| 6.13 | 金 | 大阪毎日支局後援　神戸高商対神戸基教青年会　バレーボール競技　15日午後4時諏訪山下武徳殿コートで |
| 6.14 | 土 | 観覧随意　神戸高商対基督青年会　バレーボール　15日午後4時武徳殿コート　大阪毎日支局後援 |
| 6.15 | 日 | （前日と同じ）観覧随意　神戸高商対基督青年会　バレーボール　15日午後4時武徳殿コート　大阪毎日支局後援 |
| 6.16 | 月 | 神戸高商対基督教青年会　バレー・ボール競技　2点の差で　基督教青年会勝つ<br>高商側選手の顔が揃うた時分には　青年会方のサーブに始まつた　一撃6点を得て気焔万丈<br>青年会方優勢で17点進んだが　何れが勝つか敗くるか判じ難く　最初の試合として記念すべく |

大阪毎日新聞兵庫県附録より

あつたので早速コーチ嘱託の神戸基督教青年会の奥村主事と我社運動部の大塚銀次郎氏とがボール持参で午前9時から学校に行つてコーチを始めた」とあり，事前に女学校等に働きかけていたことも考えられるが，次は，県一高女へはじめてコーチに出向いた時の様子である。

> 先づ大塚本社員から大体のルールの説明をしてから補習科生徒20名と5学年1の組40名ばかりが2組に分れて運動場テニスコートを其儘使用してボールの衝き合ひをしたが両手で大きな球を衝くのであるから忽ちの内に熟達し誰れも彼れも上手に衝けるようになった，次にサーヴの練習をしたが之も大体テニスと同じ要領であるからテニスを知つてゐる学生達の事とて直に巧く相手のコートに這入るようになり敵味方60余名が一つの球の舞ふ儘に賑やかに戯れて時の経つのも知らなかった，

また，2時間続けて行った補習科生徒は，「学校で買つて呉れるまで待つてゐる事が出来ないで直に丸善に註文してボール1個を取り寄せた，之れを見ても如何に此運動が婦女子に恰好で且興味の深いものであるかゞ判るであらう，当日は篠原校長を始め多数の教職員が見物してゐたが何れも其有益にして危険のない事を認めたから大に之れを全校生徒に試みさせると語つて」とあり，「当分此学校でコーチをする筈であるが尚練習希望の学校は……全く此面白い有益な競技を広い世間に勧め度いからであります」と終わっている[15]。

5月27日（火曜日）には，「女学校体操教師の　バレーボール見学　此競技は益々普及する」との記事がみられる。

県下高等女学校の体操教員十数名が，26・27の両日，神戸市立高等女学校において「女学校の体育に就て種々協議してゐる」が，26日夜は，「我社の勧奨しつゝあるバレーボールの実際に就て見学する事となり午後8時から神戸基督教青年会館に至り特に同会選手に嘱して同競技を行ひ観覧したが」「孰れも其有益にして危険なく婦女子の競技として適当なる事を是認した，今後此競技の

益々拡く普及すべきは最早疑ひのない所」とするものであるが[16]，大阪毎日神戸支局の働きかけでこの見学が実施された，とも考えられる。

5月28日（水曜日）は，「バレーボールコーチ　日割決定」とするもので，「バレーボールコーチの事一度紙上に発表さるゝや女学校，小学校よりの申込み殺到……手近い処から当分左の如くコーチ……之に洩れた各校は……」とし，表1にあるようにコーチに出向く予定を掲載している[17]。

6月8日（日曜日）には，「バレーボールコーチ　各校とも素晴しい上達　県下運動界に一新面開かる」としている。

コーチ実施日は，月曜日から金曜日までとなり，コーチ日割と各校での様子を載せている。「学校側より頗る歓迎せられ各学校共其有益なる事を異口同音に裏書して呉れた」「学生側からの歓迎も非常なるものでコーチの日の来るを楽みに待ちかね，暇さへあればボールを打上げて熱心に練習」とバレーボール指導の好評ぶりをアピールしている。

また，「進歩の速度が予想したより早く……女学校の四五年生になると身体も十分に発育してゐるしテニスをやつてゐるから1時間か2時間のコーチで直ぐに要領を覚え込んで見事な球を入れる，女学院などはテニスの上にバスケツトボールの経験があつて大きい球に慣れてゐる」と女子生徒の技術を分析し，小学生は，「身体が小さいだけに少し進歩の度は遅いようであるが入江小学校の男子の生徒などは勇猛に突進して各自先を争つて球を打つものであるから案外に成績がよく」ともしている。

さらには，コーチの選に洩れた学校に対して，「日割に応じて当該学校の許可を得てコーチの見学をして頂き度い，不審の点は遠慮なく係りの者に御問ひ合せを願ひ度い，コーチヤー一同は喜んで応答致します」との配慮を載せている[18]。

以上のように，女学校，小学校におけるバレーボールのコーチがはじまったようであるが，兵庫県下の中学校における男子バレーボールについて，1896（明治29）年開校の兵庫県立第一神戸中学校（現在の兵庫県立神戸高等学校）で

は，「バレーボール競技も大正末期から昭和初期にかけて中学校のスポーツにも次第に採用……神戸一中に於いても籠球部とわかれ大正15年に創設」[19]とされている。

3）1919（大正8）年6月15日（日曜日），大阪毎日神戸支局後援「神戸高商対神戸基督教青年会　バレー・ボール競技」

6月13日（金曜日）には，「大阪毎日支局後援　神戸高商対神戸基教青年会バレーボール競技　15日午後4時諏訪山下武徳殿コートで」とした案内を掲載している。

その内容は，「一度我神戸支局がバレーボールを各学校に推奨コーチし始めてより未だ一箇月も経たないのに此競技は早くも神戸市を中心として全県下に亘つて一大流行を為さんとして居る」。そして，「此時に当つて我支局は更に神戸高商対神戸基督教青年会のバレーボール試合を後援し」，「広く此新しい競技を一般人士に紹介しやうと思ふ」とある。

そして，「バレーボールのコーチ開始」（7頁）のところで取り上げたように両チームの紹介があり，「接戦は蓋し理想的にして而も白熱的のものがあるであらうと信ずる」としている。

また，「当日は勿論入場無料であるから成るべく多数の紳士淑女が此競技を観覧して其興味のある処を感得せられん事を希望」と，この試合の観戦は，男女を問わず一般市民すべての人に勧めるものとなっている[20]。

翌14・15日（土・日曜日）は，この大会の案内のみの掲載である[21][22]。試合翌日の16日（月曜日）は，「神戸高商対基督教青年会　バレー・ボール競技　2点の差で　基督教青年会勝つ」という見出しである。

当日における両チームの様子に加えて，「高商側選手の顔が揃うた時分には谷山教諭に引率された親和女学校の学生三四十名許りと神戸女学院の木村教頭基督教青年会の村松理事長外数十名の観覧者」とあり，「我社大塚社員レセリー，奥村，中野両氏ライスマンにて青年会方のサーブに始まつた」としてこの

試合の状況が記されている。「ゲーム緊張して来ると見物の女学生達も思はず拍手喝采」とあるが，21対19という「クロツスゲーム」であったようである。

終わりに，「神戸市における野外バレー・ボール競技の最初の試合として記念すべく最も興味ある競技であった，何れ近日更に日を期して第2回戦を行ふ筈」と括り両チームの選手名（各13名）を載せている[23]。

## 3. 大阪毎日神戸支局主催「女子バレーボール競技大会」，「第2回女子バレーボール大会」

1）1919（大正8）年12月6日（土曜日），「女子バレーボール競技大会」

1919（大正8）年12月1日（月曜日）付の大阪毎日新聞兵庫県附録には，「女子バレー・ボール競技会」開催の案内として次のようなものがみられる[24]。

> 女子バレー・ボール競技会
> 来る6日午後1時から
> 本社は嚢に婦人の運動としてオリムピツク競技の一なるバレー・ボールを推奨し親しく各学校を巡回コーチしましたがソレ以来漸く此運動の面白味と体育上有益な事が実際に於て証拠立てられましたので本社は更に茲に此競技会を開いて一般婦人に見て戴かうと思ひます，但し此競技会は飽まで婦人本位のものですから男子方の観覧は残念ながらお断り致します
> 県立高女運動場にて
> 大阪毎日神戸支局主催

これは，「バレーボールのコーチ開始」発案当初からの計画で5月以降各女学校や小学校に指導に出向いた結果女学校同士の競技会は成立すると判断した，とも考えられる。「婦人の運動」として「此運動の面白味」と「体育上有益」なことが確認出来たことから，本社が更に「競技会」を開催して「一般婦人に見て戴かう」ことにしたというものである。しかし，「運動の面白味」と「体育

上有益」についての具体的内容は記されていない。

また，6月に実施された神戸支局後援「神戸高商対神戸基督教青年会　バレー・ボール競技」は，「多数の紳士淑女」に「観覧」としているが，この競技会は，「婦人本位のものですから男子方の観覧は残念ながらお断り」としている。

この「女子バレーボール競技大会」に関する記事は6日間みられたが，これについても見出しと主な内容を表2に取り上げたが，その後の記事内容を追ってみる。

12月2日（火曜日）は前日と同じ案内の掲載である[25]。

12月4日（木曜日）には，「女子バレーボール競技会」「出場者決定　市内5高等女学校と神戸女学院大学予科　主催大阪毎日神戸支局」とある。

「我社が我国初めての試み」である「我社主催の女子バレーボール競技会」に「各女学校共非常の興味を持ち」，「県立，市立，親和，松蔭，女学院の各高等女学校の最上級並に女学院大学予科及び英語専修科より各14名の選手が出場する事に決定」した。そして，「神戸市内に於ける全部の高等女学校を網羅し得たのは此上もない喜び」との記事である。

また，「競技組合（きょうぎくみあはせ）其他競技に関する規定」「日時」「会場」「観覧」について記されているが，「観覧」については，先の案内にあったように「婦人方は御随意ですが男子方は此会の性質上入場をお断り」としている[26]。出場校についても，事前に依頼をしていたことが考えられる。

12月5日（金曜日）は，「神戸支局主催」「女子バレーボール競技会」「競技番組決定　県立高等女学校運動場で　愈明日　午後1時から　婦人観覧随意」という見出しである。「各学校とも昨今熱心に練習中ですから当日は定めし緊張したソシテ又美しい競技が見られる事でせう」「競技番組は本社に於て抽選の結果左の通り決定」として対戦予定を載せている。

そして，「叙上9組合せで各学校は何れも3回宛競技する事になります，そして3回の競技を通じて敵に与へた点数の最も少い学校を以て優勝者と認めま

表2　1919（大正8）年，大阪毎日神戸支局主催「女子バレーボール競技大会」に関する記事

| 日にち | 曜日 | 見出しと主な内容 |
|---|---|---|
| 12.1 | 月 | 女子バレー・ボール競技会　来る6日午後1時から　県立高女運動場にて　大阪毎日神戸支局主催 |
| 12.2 | 火 | （前日と同じ）女子バレー・ボール競技会　来る6日午後1時から　県立高女運動場にて　大阪毎日神戸支局主催 |
| 12.4 | 木 | 女子バレーボール競技会　出場者決定　市内5高等女学校と神戸女学院大学予科<br>競技組合　日時　会場　観覧<br>主催大阪毎日神戸支局 |
| 12.5 | 金 | 神戸支局主催　女子バレーボール競技会<br>競技番組決定　県立高等女学校運動場で<br>愈明日　午後1時から　婦人観覧随意<br>県立高女対女学院高女　女学院大学対松蔭高女　市立高女対親和高女<br>県立高女対松蔭高女　市立高女対女学院高女　女学院大学対親和高女<br>市立高女対松蔭高女　女学院大学対県立高女　親和高女対女学院高女<br>『優勝額』贈呈　優勝学校選手の姿を着色銅版にした美しい額 |
| 12.6 | 土 | 女子バレーボール競技会<br>本日　午後1時から［雨天順延］　県立高女校庭<br>大阪毎日神戸支局主催 |
| 12.7 | 日 | 女子バレーボール競技大会　花の如き6校の選手<br>或は胡蝶の襟飾を胸にひらめかせ　或は白襷甲斐甲斐しく綾どつて　秋空に球を逐うて戦ふ<br>我国初めての試み　各回何れも白熱戦<br>胡蝶のやうな襟飾を胸にひらめかせ　女学院高等部と県立高女との対戦　まじろぎもせずにボールの行方を<br>戦績<br>第1回　県立高女（計17）　女学院高女（計21）　第2回　女学院大学（計21）　松蔭高女（計18）<br>第3回　市立高女（計19）　親和高女（計21）　第4回　県立高女（計21）　松蔭高女（計2）<br>第5回　市立高女（計12）　女学院高女（計21）　第6回　女学院大学（計16）　親和高女（計21）<br>第7回　市立高女（計21）　松蔭高女（計5）　第8回　女学院大学（計21）　県立高女（計18）<br>第9回　親和高女（計15）　女学院高女（計21）<br>謹告　大阪毎日神戸支局<br>秋空に飛ぶ球を逐うて……（写真） |

大阪毎日新聞兵庫県附録より

大阪毎日新聞兵庫縣附録　大正八年十二月五日

神戸支局主催
女子バレーボール競技會

競技番組決定
縣立高等女學校運動場で―

愈明日―午後一時から
婦人観覧随意

縣立高女 對 女學院高女
女學院大學 對 松蔭高女
市立高女 對 親和高女
縣立高女 對 松蔭高女
市立高女 對 女學院高女
女學院大學 對 親和高女
市立高女 對 松蔭高女
女學院大學 對 縣立高女
親和高女 對 女學院高女

競技は九組合せで各學校は何れも三回競技する事になります、そして三回の競技を通じて最も點數の多い學校を以て優勝者と認めます、若し同點の學校があつた場合には更に決勝戦を行ふ事にします

『優勝額』贈呈
優勝學校選手の姿を着色銅版にした美しい額

大阪毎日新聞兵庫県附録
1919（大正8）年12月5日より

す，若し同点の学校があつた場合には更に決勝戦を行ふ事にします」と優勝決定の方法が記されている。

さらに，「『優勝額』贈呈　優勝学校選手の姿を着色銅版にした美しい額」として，本社で特製したとあり，「此額を以て永く優勝校の名誉を表彰しようと思ひます」とされている[27]。

12月6日（土曜日），競技会当日の新聞は，「女子バレーボール競技会」「本日　午後1時から[雨天順延]　県立高女校庭」「大阪毎日神戸支局主催」としたものである。

「本日のバレーボール競技は大体に於て日本体育協会の制定したオリムピツク競技規定による筈なるがチームの人員其他特殊のものもあるから此処に大体のルールを記す事とする，またバレーボールの何物をも知らない人も此ルールを読んで実際を見たならば容易に了解する事が出来るであらう」として，対戦の順序とルール(7)を掲載している[28]。

12月7日（日曜日），「女子バレーボール競技会」が終了した翌日には，「女

子バレーボール競技大会」と「競技大会」という名称に変更され，紙面の約四分の一と大きく紙面を使用している。そして，「秋空に飛ぶ球を逐うて」とい

---

（7） この日に掲載のルールは次のようである[61]。

一，各チームの人員を十四人とす

一，競技開始前両軍ネツトを中央にしてコートに向合つて整列し審判官と共に敬礼を交換する事

一，各組キヤプテンを予め定め置き審判官の指揮下に手拳を行ひ勝者はサーヴ権を獲得し敗者はコートの位置選択権を獲得する但サイドは両軍の孰れか一方が十一点に達した時チエンジする

一，練習時間は三分以内

一，サーヴはサーヴラーンに片足をかけ片足にて球を敵陣内に打込む，ネツトに触れ若しくは敵陣外に逸した場合は二回行ふ事が出来る

一，ネツトインはノー・カウントとする

一，陣外に逸したる球もレシーバーが陣中に足を置いて受けたる時はセーフとなる

一，味方同志三度打球する間に敵陣に入れねばならぬ

一，同一人は継続して二度打球する事は出来ぬ，但しネツトにかゝつた時には二度又味方の打つた球が自己の陣外に出でたる場合は三度まで継続打球する事が出来る

一，球を膝以下に触れてはならぬ膝以上の部分に触れし時は一打球と認める

一，球がネツトに触れし時以外身体の如何なる部分もネツトに触れてはならぬ，但し打球したる後惰勢にて触るゝのは此限でない

一，身体の如何なる部分も敵陣に入れてはならぬ

一，両軍孰れにか失錯ありボール・イン・デツドとなりし時には審判官は警笛を以て通告する

一，サーヴ・サイドの失錯したる場合にはサーヴ権を相手方に譲るのみで得点を与へない

一，レシーヴ・サイドの失錯した場合はサーヴ方に一点を与へる

一，サーヴ方は敵にサーヴ権を与へるまで同一人が継続してサーヴを行ふものとする

一，サーヴ順は予め定め置きしものに従ふ

一，両軍孰れか十一点を算したる時コートサイドをチエンヂする

一，二十一点を先取したる方を勝利者とする

一，カウントはサーヴ方より呼ぶ

一，全試合を通じ敵に与へたる点数の最も少きものを以て優勝チームとする，同点数の場合には更に決勝戦を行ふ

一，優勝チームには其学校の名誉を表彰する為優勝額を贈呈する

う言葉を添えて試合中の写真を掲載しているが，当時にあっては相当目を引いたのではないだろうか。

この「競技会」から「競技大会」への変更の真意はどこにあるのか。「大会」は，生徒が互いに競技をすることだけが目的ではないとも受け止められよう。

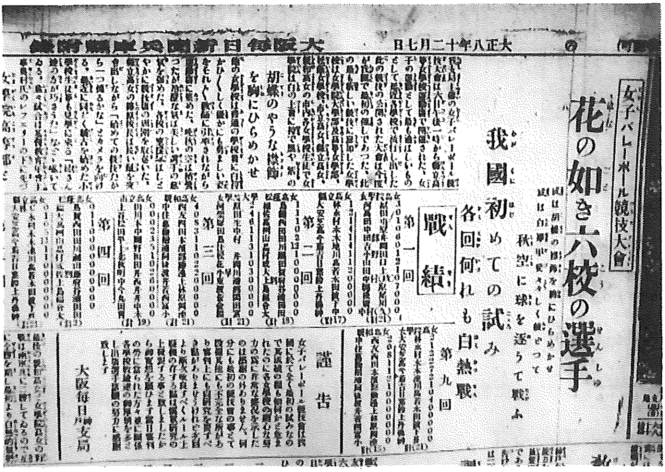
その他見出しに「花の如き6校の選手」「或は胡蝶の襟飾を胸にひらめかせ　或は白襷甲斐甲斐しく綾どつて　秋空に球を逐うて戦ふ　我国初めての試み　各回何れも白熱戦」とされ，戦績と各対戦の様子が記されている。

その内容は，「我支局主催……女子の運動として最も適はしいものとして最近各学校で流行し出した此の競技の公開された大会は今度が我国で最初の催し」とはじまるものである。

「女学院は白の上着に袴で黒や紫の胡蝶のやうな襟飾を胸にひらめかせ他の女学校は普通の学校着に白袴かひかひしく優かにも勇ましい姿」や「晩秋の空は梢雲つたが冷澄な気は美しい選手の意気を強めた，各校の応援隊はしとやかに競技場の周囲を取巻いた」と正に当時を彷彿させる表現である。

また，試合は，「基督教青年会主事奥村氏のレフエリーの下に」とあり，「コートの中に前衛中堅後衛と3列に花のやうに美しい選手達が陣を布いて試合開始の合図を待つ」「エラーが出ても，フワインプレーが出ても拍手と喝采が競技場の四周からドツと起る，勇ましい中にも女性の優しさが場内に漲つた」と続く。

「まじろぎもせずにボールの行方を彼処此処と追つて行く，回の進むにつれて選手も熱すれば見物も熱する，接戦に次ぐに接戦を以て競技は次第に白熱状態に押し進んだ斯うして愉快な晩秋の一日は健気な少女の血を湧き立たせ前後9回に亘るゲームは少しも緊張味を失はずに予期以上の大盛況裡に午後4時10分終了」と，はじめて「応援隊」が見守るなかで，他校の「選手」と対戦した，「競技」における緊張と勝負の面白さを綴っているが，「予期以上の大盛況裡」に終わったとのことである。新聞社が『優勝額』を用意したところも見逃せない。



大正八年十二月七日

大阪毎日新聞兵庫県附録

女子バレーボール競技大会

花の如き六校の選手

秋空に球を逐うて戦ふ

我國初めての試み

各回何れも白熱戦

胡蝶のやうな襟飾を胸にひらめかせ

戦績

第一回

第二回

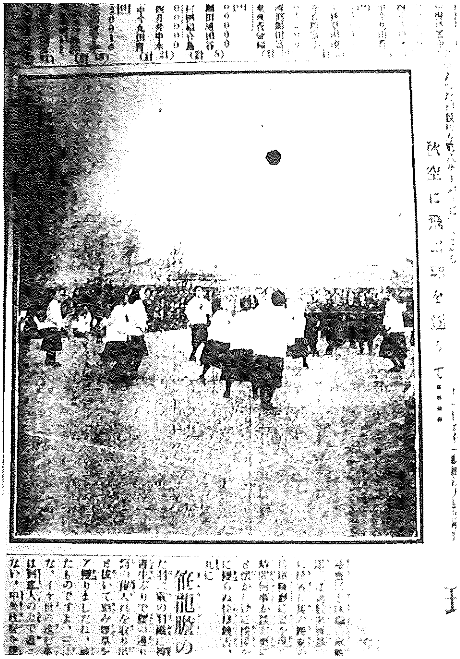
第三回

第四回

第九回

謹告

大阪毎日神戸支局



秋空に飛ぶ球を逐うて……

大阪毎日新聞兵庫県附録
1919（大正８）年12月７日より

終わりに，「最後の親和高女と女学院高女の対戦は両軍共に2勝してゐるので互に全勝を期し……女学院勢ひに乗じ遂に全勝の栄誉」と，優勝決定の方法が6月5日掲載の内容（3回の競技を通じて敵に与へた点数の最も少い学校を以て優勝者）とは異なっている。

同時に，「謹告」として，

女子バレーボール競技会は我国に於て全く最初の試みなので其成績の程も如何かと危まれたのに各女学校の熱心な努力の為に非常な盛況を示したのは感謝の外ありません，何分にも最初の競技会の事とて設備其他にも不完全な所があり審判上にも尚研究を要すべき点がありませうけれど次回より漸次改良すべくルール上疑義の存する点は慎重研究の上発表する事と致しましたから御寛恕を願ひます当日審判の労に当られた方々並に関係各学校教諭達の御厚情を多とし出場選手諸嬢の努力に感謝致します

大阪毎日神戸支局

の掲載がある[29]）。

さて，このように確認したが，西原による「『大毎』のスポーツ関連企画・イベント」をみてみると，1901（明治34）年12月，「堺大浜で，50マイル徒歩競争主催」以後，毎年のように主催等行っているが，婦人や女子という名称がみられるのは，1913（大正2）年の「浜寺海水浴場に婦人水浴場を設置」以後，1923（大正12）年12月2日の「大手前女学校で，第1回女子中等学校学校対抗バレーボール大会を主催」までみられず，これ以降増えている。

同じく「『大朝』のスポーツ関連企画・イベント（「全国中等学校優勝野球大会」の各地区予選大会は除く）」も同様で，1922（大正11）年6月4日，「広島通信部，第3回広島県女子体育大会を後援」以後みられる[30]。

西原は「明治末から大正期にかけて各新聞社は野球をはじめとした各種スポーツに積極的に関与し始める」[31] とし，玉置は「大正時代……全国紙とし

て覇を競い合った朝日，毎日両新聞社のライバル意識は，スポーツ事業という独特の文化を生み出し，関西スポーツ界の求心力ともなった」[32] とされているが，「我社が我国初めての試み」という言葉から，日本ではじめての女子のバレーボールの大会をいち早く手がけるという側面があったかもしれない。

翌12月８日（月曜日）の紙上には，「世象合評　ＡＢＣ　第八夜　ヴアレーボール，婦人見学，宝塚少女歌劇」とする記事がみられた。

「我支局は６日神戸６女学校の為にヴアーレボールの競技を行ひました。かく多数の女子の対校競技といひ，又ヴアーレボールてふ新遊技を婦人諸君に紹介し得たとは何よりの光栄と存じます」とするものである。

本文には，「Ｃ　支局では６日に市内６女学校のヴアレーボール競技をやり17日には宝塚の少女歌劇……ドレもコレも年の暮に追つてやることだけに旧来の婦人の頭脳から考へると痛烈な皮肉だな!!」「Ａ　実際愉快だな，年末とか何とか習俗的な観念から超越してゐる丈けでも面白いな!!」「Ｂ　ヴアレーボールの競技も我国最初のものだそうだが，競技の本質的価値よりも若い処女たちが寒天に血を躍らせて団体運動を行ふといふこと其丈けでも意義があるな」「Ａ　白い襷を十字に綾取つたのや蝶々ネクタイを翻して嬉々として球を追つてゐる処なんかドガの絵を見るやうな気持だ」「Ｃ　解放其自身かも知れんな」「Ｂ　……俺たちは右のやうな高義な意味に於て神戸の婦人達を歓迎しやうではないか」といった内容もみられた[33]。

2）1920（大正９）年６月12日（土曜日），「第２回女子バレーボール大会」

翌1920（大正９）年の大会についても大阪毎日新聞兵庫県附録を確認してみた。これは，県一高女の「会報」に６月12日に行われたことの記述がみられるが，６日間の掲載があった。これについても表３に見出しと主な内容を取り上げた。

６月２日（水曜日），「第２回　各女学校　バレーボール大会」と，「女学校」

の大会とする案内を掲載している。「来る5日午後1時　正午から競技規則説明　神戸女学院校庭で　来観随意但し婦人に限る　大阪毎日神戸支局」というものである[34]。

その後，6月5日（土曜日）が雨天のため12日（土曜日）に延期となっている。また，大会当日，翌13日には，「第2回女子バレーボール大会」と名称が変わっている。

6月12日（土曜日），大会の案内とともに「支局主催バレーボール大会に出場する　各女学校の陣容」としている。

昨年と比較してみると，「県立高等女学校でも毎日練習を怠らず此間も女学院に出かけて練習マツチをした，不幸敗れたが大いに得る処があつたといふ」と他校へ練習試合に出かけていることや，「大会当日には特に揖保郡の龍野高等女学校からも生徒が参観に来る筈で武庫郡御影の増谷女学校も近日バレーボールを開始する其準備に当日見学するとの事」とバレーボールが神戸市以外の女学校にも広がりをみせているとの記事が載せられている[35]。

大会翌日6月13日（日曜日）は，「支局主催バレーボール大会」として，「優勝の栄冠は女学院高女へ　18対21の差で　緊張した各校選手の戦ひと　熱狂せる応援団の応援」として前年よりも大きく取り扱われている。

出場校は，昨年と同じ6女学校96名の「選手達」，「龍野高女からワザワザ見学に来た10名の選手」と紹介し，「審判員（アンパイア）は高商の多田氏で線審査員（ラインマン）は御影師範の高宮足立の二氏」とある。そして，「バレーボール大会　スタンドに並んだ美しい観衆(上)と女学院大学と親和両校選手の挨拶」とする2枚の写真と「戦つた人々」とする各校選手名を載せている[36]。

記事内容は主に各対戦の様子であるが，「2勝者の優勝戦に入つた，破れる様な拍手に迎へられて両校の選手は対戦……無心のボールは只地を這うて兎もすれば落ちんばかりなのを両軍32名のか弱き乙女の選手に弄ばれ……競技は極度に緊張……勝敗は遂に決した」という言葉から，表現は違えど今日における大会記事となんら変わらない内容であることの印象を受ける。正に，見出しに

表3　1920（大正９）年，大阪毎日神戸支局主催「第２回女子バレーボール大会」に関する記事

| 日にち | 曜日 | 見出しと主な内容 |
|---|---|---|
| 6.2 | 水 | 第２回　各女学校　バレーボール大会<br>来る５日午後１時　正午から競技規則説明<br>神戸女学院校庭で　来観随意但し婦人に限る<br>大阪毎日神戸支局 |
| 6.4 | 金 | 第２回各女学校　バレーボール大会　明５日午後１時　神戸女学院校庭<br>当日は定めし面白いゲームを見せる事でせう　各女学校共昨今熱心な練習をしてゐます |
| 6.5 | 土 | 第２回各女学校　バレーボール大会　神戸女学院校庭で<br>愈々本日午後１時　万一雨天の節は次の土曜日<br>緑の芝生と美しい建物をバックにした絵のやうな女学院の校庭で幾百の<br>女学生が花の如く蝶の如く群れ遊ぶ姿は如何に美しい事でせう<br>観覧は婦人に限り随意<br>特に正午から此競技のやり方に就て女学院理科室で説明をします<br>主催大阪毎日支局 |
| 6.6 | 日 | 第２回各女学校　バレーボール大会　12日（土曜）に延期 |
| 6.12 | 土 | 本日　午後１時＝競技開始＝観覧随意＝但し婦人に限る<br>（午後零時30分より観覧者の為に競技規則の説明をします）<br>女子バレーボール大会<br>出場学校　県立神戸高等女学校　市立神戸高等女学校　私立松蔭高等女学校<br>私立親和高等女学校　神戸女学院大学部　女学院高等女学部<br>主催大阪毎日神戸支局<br>- - - - - - - -<br>支局主催バレーボール大会に出場する　各女学校の陣容<br>女学院大学部のハンチキヤツプ<br>県下各女学校の参観　大学部　女学院　親和は　御影の |
| 6.13 | 日 | 支局主催バレーボール大会<br>優勝の栄冠は女学院高女へ　18対21の差で<br>緊張した各校選手の戦ひと　熱狂せる応援団の応援<br>第１回　女学院大学(21)－親和(10)　県立高女(15)－女学院高女(21)　市立高女(21)－松蔭(２)<br>第２回　親和(14)－県立高女(21)　松蔭(５)－女学院高女(21)　市立高女(21)－女学院大学(16)<br>第３回　女学院高女(21)－市立高女(18)<br>バレーボール大会　スタンドに並んだ美しい観衆(上)と女学院大学と親和両校選手の挨拶（写真）<br>戦つた人々　各校選手名 |

大阪毎日新聞兵庫県附録より

大阪毎日新聞兵庫県附録
1920（大正9）年6月13日より

ある「緊張した各校選手の戦ひと熱狂せる応援団の応援」通りである。「大会」は，各校の生徒が一同に集う交流の場でもあるが，応援者が見守るなかで代表選手が試合を行うということは，学校対抗という意識から，母校への帰属意識を強くつくり出したのではないだろうか。写真をみると一目瞭然である。

この大会の結果は，同13日の大阪毎日新聞にも掲載されている[37]。

## 4. 新聞社主催の大会がもたらしたもの（県一高女における大会出場とその後の課外のスポーツ活動）

ここであらためて，県一高女における1919（大正8）年の課外の運動のなかで，庭球・バレーボールの大会出場とその後の様子について確認してみる。

5月22日，大阪毎日新聞兵庫県付録紙上に「大阪毎日神戸支局主催」による「バレーボールのコーチ開始」の案内があり，県一高女は早速申込み，その日から同校において同局嘱託のコーチによる指導（1週1度5回で終了）を受けていた。

7月26日，同校はじめての対外試合となる，「大阪時事新報社主催」の「関西女学校庭球大会」が梅田高等女学校の運動場で開催され(8)新聞社の依頼により出場した。ちなみに，テニスの校内大会は，1907（明治40）年から行われていたようである[38]。

大会へ初出場することとなった時の様子は，

> 練習期間は一ヶ月足らずである，これまで他校との試合をしたこともなく殊に学期試験を眼前にひかへた多忙のからだ負けるのはもとより覚悟の上である，第一部（4年以下）に4人第二部（5年）に4人補欠3人合計11人の選手の練習は始まつた焼けつくやうな烈日の下に，谷明平野田中の諸先生はお忙しい中を種々お導き下された，殊に御影師範の高宮先生（高宮亀喜・後に同校体操教師；筆者注）は選手のために態々御来校熱心に御指導下された一同感謝する所である，又三輪先生はじめ各先生方はあまりに烈しき練習に色々と御心配下され或は冷き en湯をたまはり又活力をつけるため鶏卵牛乳等をいたゞいた，やがて選手の顔は黒く光り出すころ

であり，大会当日については次のようである[39]。

> 万国旗新聞社旗朝風に飜りはや選手応援人見物人等所狭きまでに集つて居た，やがて8時を合図にゲームは加つた厳粛な審判の下に勝負はどんどん進んで行く。つひにわが校第一部A組の出場のときは来た，手に手に汗を握つてボールをにらむ，花々しく戦つたが残念ながら市岡高女のために敗られた，次のB組は見事に河北高女を仆したが2回戦で又もや市岡高女に勝を譲つた。されど第二部の猛者連B組は名にしおふ河北，同志社を撃破

（8） 白銀は，1919（大正8）年5月，大阪時事新報社主催「関西女学校庭球大会」とし，「多年の壁を破って府外から女学生が参加するという画期的な大会となった」としている[62]。

し第3回戦に入るゲーム2対2，スリーツウの激戦阪神の各校始め(ママ)無数の見物人満場粛々として片唾を呑む。アヽ無念最後の一球は終に敵をして名を成さしむるにいたつた，得た所は三等賞に過ぎなかつたが初陣としてはたしかに成功であつた，試合終りて選手慰労茶話会があり一同参加章をいたゞいた。

そして，12月17日発行の「会報」第十四号に，「運動部だより」（運動係）として，「概況，近来運動の必要が大にとなへられ，殊に女子の運動について世人のひとしく注目するところとなつた(9)。本校の運動部も今年より益さかんとなり……運動時間には放課後十分の鐘を合図に一同運動場に出で」とあり，「この庭球大会により刺激されし吾校の運動部は，いよいよ活動的となり，第二第三の選手は続出する有様である」とされている[40]。

そして今回，同年12月6日，「大阪毎日神戸支局主催」による「女子バレーボール競技大会」へ出場していたことが確認出来た。この大会の出場に際しても，主催した新聞社の働きかけがあったことが十分に考えられる。しかし，この大会について，「会報」第十四号への掲載は日にち的に難しかったと思われるが，翌年の「会報」にもみられなかった。

1920（大正9）年の「会報」第十五号にある「運動部記事」をみてみると，

---

（9） 1918（大正7）年1月4日の「大阪時事新報」は，大阪医科大学教授木下博士（談）として，「男子よりも女子」という見出しのなかで，1917（大正6）年9月28日には「府下及び近畿の女学校の運動に関係ある先生達を中心として女子の体育運動に就て実際の研究を目的とした健母会なるものが成り立った，……女子の運動に関する研究はこれが嚆矢……女の運動も著しく盛んになつて来たが従つて競技の種類などもヽつと研究して殖す必要があるそうして公開出来る女子の運動会を是非本年は催したい……度々競技会を開いて女子の体育競技の進歩を図りたい……体育協会の練習会……練習者を増して正式の練習を積み体育競技の本義を会得せしめたい……ここに新しい使命を齎した女子の運動界が那辺まで開拓せらるヽかは本年の刮目すべき興味ある問題」といった記事を掲載している[63]。

先の「第2回女子バレーボール大会」について，「バレーボール大会の記（6月12日)」として，「激しい戦ひは幾度となくくりかへされて，……僅かの点数で敗北となつたは残念であるが然し他学校のを見ると私等にまだまだ練習の余地がある。もつと努力せねばならないと思つた。そして今後の仕合の時はきつと勝つと云ふ意気込で一同4時半頃女学院を引き上げた」とある。

すでに大会の感想は，「第2回女子バレーボール大会」翌日の新聞記事同様で，「激しい戦ひ」「敗北」「練習の余地がある」「もつと努力」「今後の仕合の時はきつと勝つ」といった言葉となり，他校の選手と試合をするなかで自分たちの技術レベルを知り，勝敗結果からも次の大会をめざすといった内容である。大会にて競技することの面白さや魅力が伝わってくるが，大会での勝利を目ざすことは，目的がはっきりとしており一気に盛り上がりをみせたのではないだろうか。

もうひとつ，「テニス大会（6月13日)」としたものには，「6人の選手と有志の応援隊凡そ40人と校長先生大野先生……一行は，……相手はさすがに大阪だけ中々手強い。……然しベストを尽して然る後敗れたのであるからそれはほんとに潔い事」と記されている[41]。

以上，1919（大正8）年，「大阪時事新報社」が「関西女学校庭球大会」を，「大阪毎日神戸支局」が「女子バレーボール競技大会」を主催し，これら大会に新聞社の主導により県一高女の生徒が出場したことによって，県一高女における課外の運動が大会を意識したものを含むものへと進展していった，と再確認した。

この4年後の1923（大正12）年，第6回極東選手権競技大会オープン競技女子排球において，兵庫県立姫路高等女学校（現在の兵庫県立姫路東高等学校）が優勝しているが，同校のこの大会出場に際し，兵庫県立姫路東高等学校の『六十周年記念誌』に，「田中勝之丞先生の回顧七十年による」として，「県女がこの大会に出場するようになったのは『兵庫県より強力なチームを出さなかった

ら<支那女子チームをして名をなさしめん>，だから我国女子一般のためにも奮発して出場させてほしいとの要請が強く行われた。当時，毎日新聞の記者大塚銀次郎氏は度々田中校長を尋ねて懇望した』ということである。田中校長も遂に意を決して出場にふみきった」とされている[42]。ここに「大塚銀次郎」の名前があり，同氏の働きかけがあったようである。

この大会について『創立三十周年記念誌』には，「排球が女子に最も適当なる競技なりと云ふ一般の批評は女子排球の普及発達に最もよき手助けとなりしが，排球の女子の間に普及するに至りし最大原因は……第6回極東大会なり。本大会前後に於ては本大会の優勝校県立姫路高女が天下の覇者」[43] とされている。『アサヒ・スポーツ』には，「男子とは反対に大勝した女子ヴアレー・ボール戦」としたなかで，「日本では男子よりも女子の方が遥にヴアレーが普及もし，進歩もして居ること故，寧ろ逆に遠征軍の鼻をあかしてやらうと言ふのが我チームの胸算であつた処から，此競技は頗る興味を以て迎へられた」[44] と記されている。

その後，県一高女においては，1924（大正13）年11月3日，「体育日」（体育デー）に篠原校長が話したなかに，「各運動には部長を委託し，其運動を正して盛大に導くこと。其部長は」として，次のような各種目の担当がみられる[45]。

テニス部長は高宮先生　副部長杉山先生
バレーボール部長は榊先生（榊信之助・体操教師；筆者注）　副部長山下先生
雑技部々長は榊先生

1927（昭和2）年には，校友会組織が確立されるとともに，第8回極東選手権競技大会オープン競技女子排球において同校（欽松会チーム）が優勝を果た

す等各運動部が相当な戦績を残している[46][47]。

## 5. まとめ

1919（大正8）年5月,「大阪毎日神戸支局」は，新運動である「面白い有益な競技」バレーボールを「広く世間」に普及させるために，嘱託のコーチ（当時すでにバレーボールを知る神戸高商教授岡田英定，神戸基督教青年会奥村龍三，本社運動部大塚銀次郎）をおき，女学校や小学校に限定して,「同支局主催」による「バレーボールのコーチ開始」（1週1度5回で終了）として募集を行った。

バレーボールは,「至極簡単で女子や子供には最も適当な競技」「テニスの様に少人数でなく野球や蹴球の様に広い場所を必要とせず」「競技に危険がありませんから誰でも安心」，また,「室外でも室内でも」「テニスをするだけの広さがあれば十分」「ネツト（庭球用のネツトで代用）とボール（フツトボールの球の少し軽いもの）だけ」とし,「人数は敵味方共16人内外で（四五人宛は増やしても減らしてもよい）」ボールを「丁度追羽根の様に突き合ひするのです」と紹介した。

「ボールは当方より持参」「謝礼などは要りません」として，実際に県一高女他数校へ赴き指導を行っている。

そして，5月以降「婦人の運動」として「バレー・ボールを推奨」し,「親しく各学校を巡回コーチ」した結果,「此運動の面白味」と「体育上有益な事」が「実際に於て証拠立てられ」たことから，本社決定により，同年12月6日,「我社が我国初めての試み」「大阪毎日神戸支局主催」の「女子バレーボール競技大会」を開催した。それは「一般婦人に見て戴かう」としたもので，優勝校には『優勝額』を贈呈した。

この大会に県一高女を含め神戸市内の5女学校と神戸女学院大学（予科及び英語専修科）が出場しているが,「応援隊」が見守るなかで他校の「選手」とバレーボールという「競技」を行う「大会」は,「予期以上の大盛況裡」に終わったということである。

さらには，「バレーボールのコーチ開始」「女子バレーボール競技大会」それぞれの「案内」にはじまり，「コーチ」は，「コーチ実施の学校やその様子，その成果」を，「大会」は，「出場校や対戦の順序，ルール，戦績と試合の様子」まで，という一連の流れを新聞紙上に掲載し情報を提供するという形で，大阪毎日神戸支局・大阪毎日新聞社の一貫した事業を一応完結させている。

県一高女関係者・女子生徒は，応援する人々が見守るなかで代表選手が他校の選手と対戦するという，今までにない競技のあり方を経験するとともに，大会を通して各競技の面白さが人々に実感される機会になったといえる。また，その状況や試合結果が新聞報道されることで広く読者に周知され，印象をより一層深める効果をもたらしたのではないだろうか。

上記大会に先立つ約4ヶ月前の7月26日，もう一社，「大阪時事新報社」が，「同社主催」による「関西女学校庭球大会」を開催している。

新聞社の主導するこれら二つの「大会」に出場したことから，「この庭球大会により刺激されし吾校の運動部は，いよいよ活動的となり，第二第三の選手は続出する有様である」や翌年のバレーボール大会の記に「私等にまだまだ練習の余地がある……今後の仕合の時はきつと勝つ」と記されているように，次の大会をめざすというはっきりとした目的意識をもつこととなり，同校における課外の運動は，大会を意識したものを含むものへと進展していった。

以上，県一高女というひとつの事例であるが，新聞社が主催した女子のスポーツの大会（庭球・バレーボール）が，女学校における課外の運動（スポーツ）を，大会を意識したもの（めざす）へと導いたといえよう。

## 引用文献

［1］ 掛水通子（2000）女学校と課外スポーツ，成田十次郎編著スポーツと教育の歴史．不昧堂出版，p. 99.
［2］ 來田享子（2001）女性のスポーツ参加，木村吉次編著体育・スポーツ史概論．市村出版，pp. 133-136.
［3］ 赤坂美月・永木耕介・千駄忠至（2006）旧制女学校における「体育」の定着過

程に関する研究——兵庫県立第一神戸高等女学校の事例——．実技教育研究第20号，兵庫教育大学実技教育研究指導センター，pp. 80-86.
[4] (1919) 会報第十四号．兵庫県立神戸高等女学校，p. 36.
[5] 同上，p. 35.
[6] (1986) 90年のあゆみ．兵庫県立神戸高等学校，p. 157.
[7] 日本バレーボール協会五十年史編集委員会 (1982) 日本バレーボール協会五十年史——バレーボールの発展と普及の歩み——．日本文化出版，p. 17.
[8] 古市英 (1987) バレーボール，最新スポーツ大事典．大修館書店，p. 1030.
[9] 西原茂樹 (2004) 東京・大阪両都市の新聞社による野球（スポーツ）イベントの展開過程——1910～1925年を中心に——．立命館産業社会論集第40巻第3号，pp. 115-134.
[10] 南宮昤皓・近藤良享 (2007) 日本統治期朝鮮における新聞社主催全朝鮮女子庭球大会（1921－1941）に関する研究．日本スポーツとジェンダー学会第6回大会一般発表資料，pp. 1-14.
[11] 松浪稔 (2007) 日本におけるメディア・スポーツ・イベントの形成過程に関する研究——1901（明治34）年　時事新報社主催「十二時間の長距離競走」に着目して——．スポーツ史研究第20号，スポーツ史学会，pp. 51-65.
[12] 大阪毎日新聞兵庫県付録．1919年5月22日．
[13] (1932) 創立三十周年記念誌．兵庫県立第一神戸高等女学校・校友会・欽松会，p. 357.
[14] 大阪毎日新聞兵庫県付録．1919年6月13日．
[15] 大阪毎日新聞兵庫県付録．1919年5月23日．
[16] 大阪毎日新聞兵庫県付録．1919年5月27日．
[17] 大阪毎日新聞兵庫県付録．1919年5月28日．
[18] 大阪毎日新聞兵庫県付録．1919年6月8日．
[19] (1992) 鵬雛のはばたき　神戸一中・神戸高校バレーボール部史．神戸一中・神戸高校バレーボール部ＯＢ会，p. 38.
[20] 前掲書(14)
[21] 大阪毎日新聞兵庫県付録．1919年6月14日．
[22] 大阪毎日新聞兵庫県付録．1919年6月15日．
[23] 大阪毎日新聞兵庫県付録．1919年6月16日．
[24] 大阪毎日新聞兵庫県付録．1919年12月1日．
[25] 大阪毎日新聞兵庫県付録．1919年12月2日．
[26] 大阪毎日新聞兵庫県付録．1919年12月4日．
[27] 大阪毎日新聞兵庫県付録．1919年12月5日．
[28] 大阪毎日新聞兵庫県付録．1919年12月6日．
[29] 大阪毎日新聞兵庫県付録．1919年12月7日．
[30] 前掲書(9)．pp. 117-122.

[31] 前掲書(9). p. 117.
[32] 玉置通夫，21世紀生涯スポーツ社会づくりへの提言　スポーツ文化は関西の財産. なみはやスポーツネット（ＮＳＮ）「ニューズレター」.
[33] 大阪毎日新聞兵庫県付録. 1919年12月8日.
[34] 大阪毎日新聞兵庫県付録. 1920年6月2日.
[35] 大阪毎日新聞兵庫県付録. 1920年6月12日.
[36] 大阪毎日新聞兵庫県付録. 1920年6月13日.
[37] 大阪毎日新聞. 1920年6月13日.
[38] 前掲書(3). p. 80.
[39] 前掲書(4). p. 36.
[40] 前掲書(4). pp. 35-36.
[41] (1920) 会報第十五号. 兵庫県立神戸高等女学校，pp. 62-63.
[42] (1969) 六十周年記念誌. 兵庫県立姫路東高等学校・同　東生会，p. 37.
[43] 前掲書(13). p. 357.
[43] (1923) アサヒ・スポーツ. 第一巻第七号　六月第二号，朝日新聞社，p. 19.
[45] (1924) 会報第十九号. 兵庫県立神戸高等女学校同窓会，p. 118.
[46] 前掲書(3). p. 84.
[47] 前掲書(13). pp. 353-394.
[48] 前掲書(3). p. 86.
[49] 豊田博 (1982) バレーボール，スポーツ大百科. スポーツ大百科刊行会，pp. 187-188.
[50] 木下東作 (1929) 強壮篇，健康増進叢書強壮篇（木下東作・東龍太郎). 大阪毎日新聞社・東京日日新聞社，p. 234.
[51] 佐々木等編著 (1971) 近世日本女子体育・スポーツ発展史. 二階堂学園　日本女子体育大学・日本女子体育短期大学，p. 47.
[52] 前掲書(7). p. 15.
[53] 神戸大学バレーボール部六十年史編集委員会 (1988) ザ・パイオニア――神戸大学バレーボール部六十年史――. 神戸大学バレーボール部『二水会』，p. 1.
[54] 前掲書(7). p. 17.
[55] 前掲書(53). p. 51.
[56] 「凌霜五十年」刊行会編 (1954) 凌霜五十年（学内版). p. 66.
[57] 神戸 YMCA ホームページ.
[58] 前掲書(7). p. 17.
[59] 前掲書(8). p. 1030.
[60] 白銀茂夫 (2003) なにわのミニスポーツ史. 丸善，p. 131.
[61] 前掲書(28).
[62] 前掲書(60). p. 130.
[63] 大阪時事新報. 1918年1月4日.